

表2.日米の高校生の価値観・母親の子育て観・母子の会話頻度〔平均値と標準偏差〕

		日本		米国		
		平均値	SD	平均値	SD	
高校生の価値観	地位達成志向	仕事で成功すること（仕事で成功）	1.45	0.60	1.87	0.37
		よい教育をうけること（教育）	1.15	0.69	1.83	0.43
	家庭生活志向	結婚して幸せな家庭生活をおくこと（結婚）	1.53	0.69	1.76	0.51
		子どもをもつこと（子ども）	1.33	0.75	1.28	0.73
	自己充足志向	好きなことを楽しむ時間をもつこと（趣味）	1.85	0.35	1.63	0.52
		親友をもつこと（親友）	1.88	0.36	1.79	0.44
	共生志向	人の役に立つこと（人の役に立つ）	1.69	0.54	1.27	0.58
母親の子育て観	地位達成志向	成功しようと努力すること（努力）	3.23	0.79	3.63	0.66
	社会性志向	社会性〔合成変数〕	3.62	0.38	3.71	0.43
		・良識のある判断ができること	3.79	0.43	3.73	0.59
		・自制心があること	3.47	0.61	3.69	0.60
		・まわりの人と協調できること	3.53	0.57	3.42	0.72
		・思いやりがあること	3.70	0.48	3.74	0.55
		・誠実であること	3.65	0.55	3.89	0.42
		・責任感があること	3.59	0.54	3.77	0.54
	権威志向	親の言うことをよく聞くこと（親に従う）	2.56	0.75	3.64	0.64
	自律志向	仲間にながされないこと（ながされない）	3.28	0.71	3.75	0.59
	まじめ志向	まじめさ〔合成変数〕	3.17	0.57	3.51	0.55
・信念を貫くこと		3.22	0.70	3.73	0.55	
・探求心が強いこと		3.09	0.72	3.38	0.75	
・まじめであること		3.19	0.77	3.41	0.76	
会話頻度	勉強の会話	勉強の会話〔合成変数〕	1.17	0.40	1.52	0.48
		・成績について	1.21	0.49	1.73	0.51
		・高卒後の進学について	1.45	0.55	1.34	0.71
		・授業の内容について	0.84	0.54	1.49	0.58
	日常の会話	日常の会話〔合成変数〕	1.12	0.39	1.49	0.45
		・世のなかの出来事について	1.24	0.52	1.33	0.64
		・悩み事について	0.85	0.55	1.62	0.55
		・学校での出来事について	1.28	0.50	1.53	0.61
	仕事の会話	高卒後の就職について	0.68	0.75	1.42	0.65

母親の子育て観の指標としては、母親が子どもを育てるにあたって重要と考えてきた事から（12の価値項目、「とても重要：4」「やや重要：3」「どちらともいえない：2」「あまり重要ではない：1」「重要ではない：0」と得点化）に注目した。これらの12項目も、因子分析の手法（主成分分析法・バリマックス回転・因子数を5に設定）を用いて5つの価値グループに分類し、①「成功しようと努力すること（以下、努力）」を重視するのは地位達成志向の子育て観、②「良識のある判断ができること」「自制心があること」「まわりの人と協調できること」「思いやりがあること」「誠実であること」「責任感があること」を重視することは社会性志向の子育て観、③「親の言うことをよく聞くこと（以下、親に従う）」を重視するのは権威志向の子育て観、④「仲間にながされないこと（以下、ながされない）」を重視するのは自律志向の子育て観、⑤「信念を貫くこと」「探求心が強いこと」「まじめであること」を重視するのはまじめ志向の子育て観とみなすことにした。さらに社会性志向の6項目より合成変数「社会性」（6項目についてのクロンバッハの α 値は、日本で0.818、米国で0.836）、まじめ志向の3項目より合成変数「まじめさ」（3項目についてのクロンバッハの α 値は、日本で0.679、米国で0.704）を作成し、それぞれ（0～4）の平均値を割り当てた（表2および付表3参照）。

会話頻度の指標としては、子どもが高校3年生のとき、7つの項目について母子で話し合った頻度（「ひんぱんに：2」「時々：1」「まったくない：0」と得点化）についての母親の回答を採用した。やはりこれら7つの項目を、因子分析の手法（主成分分析法・バリマックス回転・因子数は最小）を用いて3つの会話グループに分類し、①「成績について」「高卒後の進学について」「授業の内容について」は勉強の会話、②「世のなかの出来事について」「悩み事について」「学校での出来事について」は日常の会話、③「高卒後の就職について」は仕事の会話とみなすことにした。「勉強の会話」（3項目についてのクロンバッハの α 値は、日本で0.642、米国で0.689）と「日常の会話」（2項目についてのクロンバッハの α 値は、日本で0.588、米国で0.608）については合成変数を作成し、それぞれ（0～2）の平均値を割り当てた（表2および付表4参照）。

本稿では以上の変数について、主に単純集計表（平均値）と相関係数表を用いて、変数同士の関係を確認していく。

3. 分析

3.1 高校生との価値観

母親の子育て観の分析に入る前に、高校生の価値観の特徴を、本分析で使用する母子データにもとづいて確認しておこう。図2は、日米の高校生が7つの価値項目をどの程度重要（0～2）と答えているか、その平均値をレーダーグラフに示したものである。平均値1.5以上を相対的に重視されている価値観とみなすならば、①地位達成志向の価値観は、アメリカでは重視されているが、日本ではあまり重視されていないこと、②家庭生活志向と自己充足志向の価値観は、「子ども」を除いて、日米の高校生に共通して重視されていること、③共生志向の価値観はアメリカではあまり重視されていないが、日本では重視されていることなど、先行研究と同様の結果を確認することができる。

日本の高校生もアメリカの高校生も「子ども」をあまり重視していないのは、興味深い結果である（「とても重要」日本49.9%、米国44.2%、「少し重要」日本33.5%、米国39.5%）。日本でもアメリカでも、多くの高校生にとって子どもをもつことは未だ実感の伴わない遠い出来事な

のであろう。ところが日本では、合計特殊出生率が人口置換水準（人口規模が世代ごとに同等になるよう置き換えるために必要な出生率の水準、2003年は2.07）よりもはるかに低い水準に落ち込んでいるのに対して、アメリカではほぼ同水準を長期的に維持している（2004年合計特殊出生率：日本1.29、米国2.05、国立社会保障・人口問題研究所、2006年）。このことは、子どもをもつことに対する若年層の高校段階における価値づけが、実際の出産動向と直接の因果関係をもたないことを示している。さらに少子化の問題が、若年層の意識よりもむしろ、若年層を取り巻く雇用や子育て支援の環境の問題と深く結びついていることを示唆している⁽³⁾。

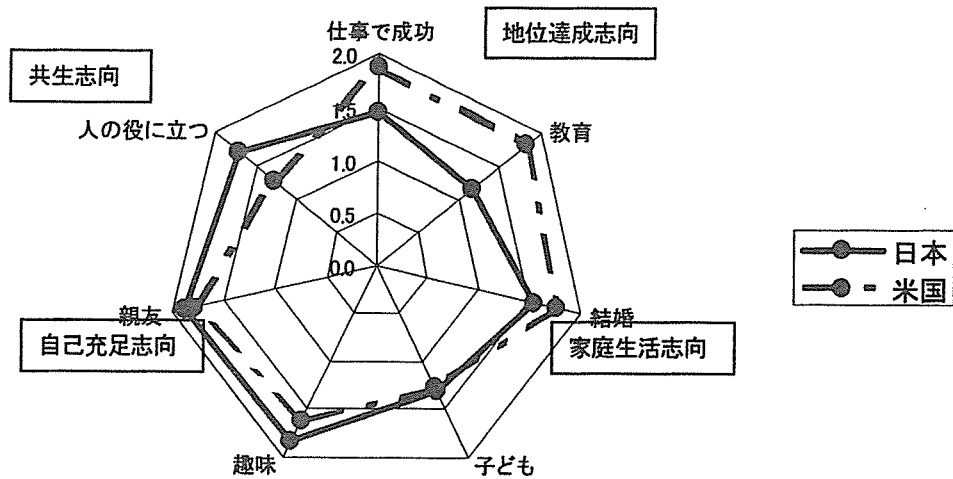


図2. 日米の高校生の価値観

表3は7つの価値項目の平均値を、家庭的・社会文化的要因別に整理したものである。先の研究（深堀、2005年）では、高校生の価値観のあり様を、「学科タイプ」と「性別」別に明らかにしたが、「所得」と「母学歴」は保護者調査より新たに得られた情報である。まず地位達成志向についてみると、既に確認したとおり、日本では統計的に有意ではないものの、「仕事で成功」を重視する傾向が、「就職系」や「進路多様系」、および「男性」で強い。一方、「教育」を重視する傾向は、「進学系」と「就職系」で強い。ただし「仕事で成功」と「教育」の相関を「学科タイプ」別にみても、普通科進路多様校（0.312, $p < .01$ ） > 普通科進学校（0.239, $p < .01$ ） > 専門学科（0.223）であることから、「就職系」は仕事も教育も重視する傾向が強いものの、必ずしも同一の生徒が仕事と教育をリンクさせて、同時に重視しているわけではないことがわかる。

なお地位達成志向は、所得・学歴における中間層が落ち込むかたちで分化している。すなわち「仕事で成功」を重視する傾向は、「中所得層（高）」「中所得層（低）」「中学歴層」で相対的に弱く、「教育」を重視する傾向も、「母学歴」が高いほど強まる傾向があるものの、「中所得層（高）」「中所得層（低）」で有意に弱い。これらの結果は、学習意欲における「階層分化」「二極化」などの言葉に象徴される、地位達成志向の高階層での高揚と低階層での冷え込みによる格差拡大のイメージとは異なるものであり、地位達成志向の希薄化の傾向が、低階層ではなく中階層に顕著に現れていることに注意を喚起する結果である。

表3 高校生の価値観 - 所得・学歴・性別・学科による差異〔平均値〕

		地位達成志向				家庭生活志向			
		仕事で成功		教育		結婚		子ども	
		日本	米国	日本	米国	日本	米国	日本	米国
所得	高所得層	1.52	1.90	1.31	1.86	1.52	1.81	1.32	1.37
	中所得層(高)	1.37	1.86	1.15	1.79	1.55	1.74	1.37	1.28
	中所得層(低)	1.47	1.88	0.98	1.84	1.65	1.77	1.44	1.28
	低所得層	1.50	1.88	1.21	1.85	1.51	1.77	1.25	1.24
	検定	NS	*	*	***	NS	*	NS	**
母学歴	高学歴	1.45	1.89	1.28	1.86	1.38	1.78	1.15	1.30
	中学歴	1.41	1.87	1.16	1.85	1.54	1.74	1.34	1.27
	低学歴	1.48	1.87	1.12	1.79	1.57	1.77	1.37	1.27
	検定	NS	NS	NS	***	NS	*	NS	NS
学科タイプ	進学系	1.42	1.88	1.16	1.89	1.48	1.80	1.28	1.34
	進路多様系	1.47	1.88	1.12	1.77	1.58	1.74	1.38	1.23
	就職系	1.51	1.90	1.18	1.81	1.65	1.75	1.43	1.26
	検定	NS	NS	NS	***	NS	***	NS	***
性別	男性	1.48	1.87	1.15	1.79	1.62	1.74	1.38	1.22
	女性	1.43	1.88	1.16	1.87	1.47	1.79	1.30	1.34
	検定	NS	NS	NS	***	*	***	NS	***
		自己充足志向				共生志向			
		好きなことを楽しむ		親友		人の役に立つ			
		日本	米国	日本	米国	日本	米国		
所得	高所得層	1.87	1.69	1.87	1.88	1.66	1.35		
	中所得層(高)	1.87	1.67	1.90	1.83	1.69	1.22		
	中所得層(低)	1.86	1.61	1.94	1.78	1.74	1.23		
	低所得層	1.84	1.56	1.85	1.71	1.66	1.36		
	検定	NS	***	NS	***	NS	***		
母学歴	高学歴	1.87	1.72	1.85	1.87	1.60	1.30		
	中学歴	1.84	1.63	1.87	1.80	1.62	1.26		
	低学歴	1.86	1.60	1.91	1.76	1.79	1.26		
	検定	NS	***	NS	***	**	NS		
学科タイプ	進学系	1.84	1.64	1.85	1.84	1.63	1.30		
	進路多様系	1.86	1.66	1.91	1.79	1.75	1.23		
	就職系	1.90	1.55	1.92	1.67	1.80	1.26		
	検定	NS	***	NS	***	+	***		
性別	男性	1.80	1.67	1.82	1.80	1.62	1.19		
	女性	1.89	1.60	1.92	1.79	1.74	1.35		
	検定	*	***	*	NS	*	***		

注) グループ平均の差の検定〔分散分析：F値〕***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, +:p<.1

アメリカでも、地位達成志向は全体としてきわめて強いものの、中間層の落ち込みのパターンが確認される。すなわち「仕事で成功」を重視する傾向は「中所得層(高)」で弱まっており、「教育」を重視する傾向も、「母学歴」が高いほど強まる傾向がある一方で、「中所得層(高)」「進路多様系」で有意に弱まっている。アメリカでは「教育」を重視する傾向が「女性」に顕

著である点が特徴的といえる。

日米の高校生に共有されている家庭生活志向と自己充足志向に注目してみよう。日本では「高所得層」「高学歴層」「進学系」「女性」の間で「結婚」や「子ども」を重視する傾向が著しく弱いのは、驚くべき結果である。「男は外で働き、女は家庭をまもる」という性役割分業の規範が支配的な近代日本社会において、女性は感情労働者として家族のケアを一手に引き受け、そうした生き方に幸福を見出すことが美德とされてきた。その象徴的存在ともいえる専業主婦を輩出してきた、相対的に恵まれた層の子どもたち、とりわけ進学をめざす女子高生たちが、近代日本女性の自己犠牲的な生き方に価値を見出さなくなっている。職業キャリア志向の若年女性にとって、家庭や子どもをもつことは、自己のめざす将来像と折り合いのつきにくい「難題」と映るのかもしれない。

対照的にアメリカでは、「結婚」や「子ども」を重視する傾向は、「高所得層」「高学歴層」「進学系」「女性」で有意に強い。アメリカでは世論形成に極めて強い影響力をもつ相対的に恵まれた層と、職業キャリア志向の女子によって家庭生活志向が支持されているのである。日本でもアメリカでも、高校生にとって結婚や子どもをもつことは未だ実感の伴わない遠い出来事なのかもしれないが、将来、家庭と仕事の両立の問題に直面する当事者となる職業キャリア志向の女子によって、正反対の受け止められ方がされている点は、注目に値する。

「親友」と「趣味」を重視する傾向は、日本では全体としてきわめて強く、とりわけ「女性」の間で顕著である。それに対してアメリカでは、「高所得層」「中所得層（高）」「高学歴層」「進学系」「進路多様系」の生徒の間で強い。また「親友」を重視する傾向に男女差はないが、「趣味」は「男性」によってより重視されている。したがって自己充足志向は、日本では若者に広く共有されている価値観であるのに対して、アメリカでは相対的恵まれたグループを中心に支持されている価値観ということができる。

最後に日本の高校生に特徴的な価値観である共生志向について整理してみよう。日本で「人の役に立つ」を重視する傾向が強いのは「中所得層」「低学歴層」「就職系」「進路多様系」「女性」である。逆に重視する傾向が弱いのは「高所得層」「高学歴層」「進学系」「男性」という、メリトクラティックな価値観を中心的に担ってきたとグループといえる。対照的にアメリカで「人の役に立つ」を重視する傾向が強いのは、「高所得層」「高学歴層」「進学系」「女性」である。したがって日本でもアメリカでも、共生志向の価値観を中心的に担っているのは女子であるが、彼女たちの家庭的・社会的背景はまったく異なっている。

以上にみてきたように、高校生の価値観の日米比較より、日本の高校生には大きく次の4つの特徴があるといえる。第一に、地位達成志向が全体としてきわめて弱く、とくに中階層の落ち込みが著しい。第二に、家庭生活志向は全体として高いが、子どもをもつことに対する高階層・進学系・女子の価値づけが著しく弱い。第三に、自己充足志向は日本の若者に広く共有されている価値観である。第四に、共生志向は全体として強いが、とくに中階層・非進学系・女子の間で顕著といえる。

3.2 母親の子育て観

日米の母親はいかなる子育て観を有しており、それは家庭的・社会文化的状況によってどのように異なるのだろうか。子どもの学校や仕事での成功を重視するメリトクラティックな子育て観を自覚的に有しているのは、高階層を中心とする一部の母親であり、低階層を中心とする大

多数の母親は、むしろ他者と協調しながら生活を楽しむことを重視する子育て観を有していると、はたしていえるのだろうか。

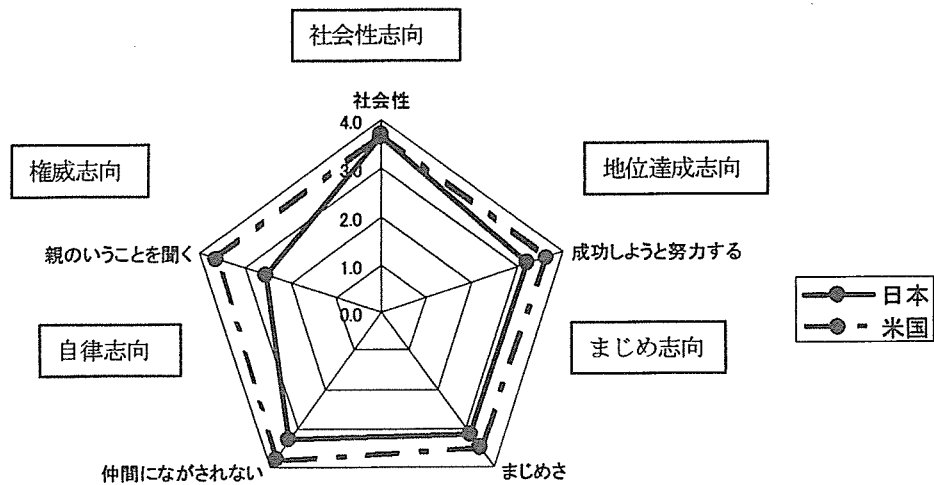


図3. 日米の母親の子育て観

図3は、母親が子どもを育てるにあたって重要と考えている事らについての平均値をレーダーグラフにまとめたものである。図より次の3点を確認することができる。平均値3.0以上を相対的に重視されている子育て観とみなすならば第一に、日米の母親は、「社会性」を共通して重視していることがわかる。良識のある判断・自制心・協調性・誠実さ・思いやり・責任感、日本でもアメリカでも、母親が子どもに伝えたいと強く願っている事らといえる。第二に、地位達成志向・まじめ志向・自律志向の子育て観は、日米の母親によって重視されているものの、その度合いは全体としてアメリカの方が強い。アメリカの母親は、社会性に加えて、成功しようと努力すること、信念・探求心・まじめさ、仲間にながされないことなどを重視する多様な価値観を、同等の比重をもって子どもに伝えようとしているのに対して、日本の母親は社会性を他の事らよりも優先する傾向があるといえる。第三に、権威志向の子育て観はアメリカでは重視されているが、日本ではあまり重視されていない。日本の母親は、アメリカの母親ほど高校生に親に従うことを強くもめていないのである。

表4は、子育てに関する5つの価値項目の平均値を、家庭的・社会文化的要因別に整理したものである。まず社会性志向の子育て観の強さには、日本でもアメリカでも、グループ差がほとんどみられない。アメリカでは「就職系」の高校生の母親に社会性を重視しない傾向がみられるものの、基本的に日米の母親たちは、家庭的・社会文化的背景にかかわらず、子どもたちに良識のある判断・自制心・協調性・誠実さ・思いやり・責任感を伝えようとしている。

地位達成志向とまじめ志向の子育て観には、興味深いグループ差がみられる。まず地位達成志向に注目すると、母親が「努力」を重視する傾向は、日本では統計的に有意な水準ではないものの、「低所得層」「進路多様校系」「女性」で弱く、アメリカでは「中所得層(低)」「中学歴」「進路多様系」で有意に弱い。したがって日本でもアメリカでも、地位達成志向の子育て観が強いのは、相対的に階層が高く、子どもが進学系または就職系の学科に在籍している母親といえる。

表4 母親の子育て観 - 所得・学歴・性別・学科による差異〔平均値〕

		社会性志向 社会性		地位達成志 努力		まじめ志向 まじめさ		自律志向 ながされない		権威志向 親に従う	
		日	米	日	米	日	米	日	米	日	米
所得	高所得層	3.67	3.71	3.30	3.61	3.19	3.46	3.23	3.82	2.51	3.51
	中所得層 (高)	3.60	3.71	3.28	3.65	3.14	3.45	3.30	3.76	2.48	3.63
	中所得層 (低)	3.62	3.69	3.30	3.60	3.15	3.51	3.20	3.71	2.65	3.61
	低所得層	3.62	3.71	3.06	3.63	3.15	3.60	3.32	3.73	2.62	3.72
	検定	NS	NS	NS	*	NS	***	NS	***	NS	***
母学歴	高学歴層	3.63	3.72	3.24	3.65	3.20	3.42	3.26	3.79	2.48	3.50
	中学学歴層	3.63	3.70	3.23	3.60	3.18	3.49	3.26	3.75	2.52	3.62
	低学歴層	3.61	3.70	3.22	3.63	3.13	3.55	3.30	3.73	2.60	3.70
	検定	NS	NS	NS	+	NS	***	NS	**	NS	***
学科 ランク	進学系	3.63	3.72	3.25	3.65	3.15	3.49	3.21	3.80	2.50	3.61
	進路多様系	3.63	3.70	3.19	3.61	3.23	3.51	3.36	3.73	2.70	3.63
	就職系	3.60	3.67	3.27	3.62	3.11	3.54	3.40	3.69	2.47	3.71
	検定	NS	**	NS	*	NS	*	+	***	*	***
性別	男性	3.62	3.71	3.25	3.63	3.20	3.50	3.24	3.75	2.44	3.65
	女性	3.63	3.71	3.21	3.63	3.15	3.51	3.30	3.75	2.64	3.63
	検定	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	**	+

グループ平均の差の検定〔分散分析：F値〕***: p<.001, **: p<.01, *: p<.05, +: p<.1

つぎにまじめ志向に注目すると、母親が信念・探求心・まじめさなどを重視する傾向は、日本では統計的に有意な水準ではないものの、「高所得層」「高学歴」「進路多様系」「男子」で強く、アメリカでは「低所得層」「低学歴」「就職系」で有意に強い。まじめ志向の子育て観は、日本では高階層を中心とするグループによって、アメリカでは低階層を中心とするグループによって支持されているといえる。したがって日本の高階層の母親は、子どもに「努力」も「まじめさ」も要求するのに対して、アメリカの高階層の母親は子どもに「努力」をもとめ、低階層の母親が「まじめさ」をもとめる傾向がある。

最後にコントロールにかかわる自律志向と権威志向におけるグループ差に注目してみよう。母親が「ながされない」を重視する傾向は、日本では統計的に有意ではないものの、「低所得」「低学歴」「就職系」「女性」の場合に、アメリカでは「高階層」「高学歴」「進学系」の場合に強い。また母親が「親に従う」を重視する傾向は、日本でもアメリカでも低階層で強いが、日本では「進路多様系」「女性」、アメリカでは「就職系」「男子」に顕著な傾向といえる。したがって日本の低階層の母親は、子どもが仲間にながされずに親に従うことを願うのに対して、アメリカの高階層の母親は、子どもが仲間にながされず親に従うこともなく、自律的な判断ができるようになることを願う傾向が強いと解釈することができる。

以上の結果より、日本の母親の子育て観の特徴として、次の3点をあげることができる。第一に、アメリカと同様に日本の母親たちによって、家庭的・社会文化的背景にかかわらず普遍的に共有されているのは、他者と協調しながら生活を楽しむルールともいべき社会性志向の子育て観（良識のある判断・自制心・協調性・誠実さ・思いやり・責任感を重視）である。第二に、日本の母親の地位達成志向は、アメリカと比べて全体として希薄であり、低階層でとくに弱い傾向がある。ただし階層差の検定結果は統計的に有意ではないことから、メリトクラテ

イックな子育て観が高階層を中心とする一部の母親に占有されていると考えるのは誤りであり、高階層を中心とする比較的幅広いグループによって共有されていると考える必要がある。第三に、母親たちは高校生の生活を手放しに肯定しているわけではなく、仲間にながされない自律性と親の言うことをよく聞く従順さをもとめる傾向が、低階層を中心とするグループに確認される。

3.3 母親の子育て観と高校生の価値観との相関

ここまでは日米の高校生の価値観と母親の子育て観の全体的な特徴と、家庭的・社会文化的要因別の差異を整理してきた。ここからは日米の高校生の価値観と母親の子育て観の連関に注目することで、母子間での価値観の再生産の実態に迫る。

表5は、日米の母親が子どもを育てるにあたって重視する5つの価値項目と、高校生が重視する7つの価値項目の相関係数を示したものである。母子間で価値観の再生産が達成されているならば、①母親が子どもを育てるにあたって成功しようと「努力」することを重視している場合、子どももよい「教育」をうけたり「仕事で成功」したりすることを重視するようになるため、母親の地位達成志向の子育て観と高校生の地位達成志向の価値観との相関は高くなるはずである【地位達成志向の再生産】。また②母親が子どもを育てるにあたって良識のある判断・自制心・協調性・誠実さ・思いやり・責任感などの「社会性」を重視している場合、子どもも「人の役に立つ」ことを重視するようになるため、母親の社会性志向の子育て観と高校生の共生志向の価値観との相関は高くなるはずである【社会性（共生）志向の再生産】。

表5 日米の高校生の価値観と母親の子育て観の関係【相関係数】

日本 子育て観	価値観	地位達成志向		家庭生活志向		自己充足志向		共生志向 人の役に立つ
		仕事で成功	教育	結婚	子ども	趣味	親友	
地位達成志向	努力	0.031	0.042	0.011	0.009	0.000	0.028	-0.046
まじめ志向	まじめさ	0.034	-0.006	-0.019	0.001	-0.070	0.030	-0.071
社会性志向	社会性	-0.026	0.023	0.026	0.009	-0.015	0.044	-0.028
自律志向	ながさげない	-0.001	0.048	0.113*	0.081	0.034	0.155*	0.004
権威志向	親に従う	0.048	0.068	0.044	0.094+	-0.015	0.036	-0.004
米国 子育て観	価値観	地位達成志向		家庭生活志向		自己充足志向		共生志向 人の役に立つ
		仕事で成功	教育	結婚	子ども	趣味	親友	
地位達成志向	努力	0.086***	0.050*	0.033**	0.016	0.021+	-0.006	0.015
まじめ志向	まじめさ	0.065***	0.075*	0.009	-0.008	-0.004	-0.016	0.049***
社会性志向	社会性	0.037**	0.000	0.051**	0.028*	-0.013	0.032*	0.019
自律志向	ながさげない	0.014	-0.005	0.055**	0.008	-0.018	0.023+	0.008
権威志向	親に従う	0.025*	0.012	0.014	-0.003	-0.023+	-0.005	0.013

注) ***: p<.001, **: p<.01, *: p<.05, +: p<.1

表5にみるとおり、母親の子育て観と高校生の価値観の間の相関係数は、全体として大きくない。したがって本分析より、母子間での価値観の再生産の実態を捉える強固な根拠を得るこ

とはできない。しかし相関係数の小ささが、必ずしも母子の価値観の連関の弱さに起因するとは限らない。本研究の場合は、分析に用いた母親の子育て観に関する変数と高校生の価値観に関する変数が、緩やかにしかリンクしていないことに起因すると考えられる。たとえば若年パネル調査では、高校生と同じ13の価値項目の重要性について保護者にもたずねているため、共通の項目に対する母子の回答の連関をみても、相関係数は全体として表5よりもはるかに大きくなっている。このことは、日本の母子の価値観の連関の強さを示している(付表5参照)。残念ながらこの設問は、NELS 保護者調査に含まれていないため、本研究で採用することはできない。したがって本研究では日米両調査に含まれている母親の子育て観の変数と高校生の価値観の変数との相関係数の有意性に着目しながら、分析を進めることとする。なお相関係数の有意性を判断するにあたって、日本側のデータのサンプル数の少なさを勘案し、アメリカ側のデータで5%水準の有意性が認められた相関係数 0.025 (表3のセル「親に従う」×「仕事で成功」を参照) よりも大きな相関係数については、意味のある相関とみなすことにする。母親の子育て観にかかわる変数はいずれも5値(0~4)、高校生の価値観に関する変数はいずれも3値(0~2)である。

まず地位達成志向の再生産の実態を探ってみよう。表5より、「努力」と「仕事で成功」「教育」の間には、日本(0.031,0.042)でもアメリカ(0.086***, 0.050***)でも意味のある正の相関があることから、地位達成志向は母子間で再生産されているといえる⁽⁴⁾。まじめ志向も、基本的には高校生の地位達成志向を高める方向に作用している。すなわち「まじめさ」と「仕事で成功」の間には日本(0.034)でもアメリカ(0.065***)でも、「まじめさ」と「教育」の間にはアメリカ(0.075***)で意味のある正の相関が確認される。したがって母親が信念・探求心・まじめさを重視することは、努力することを重視することと同様に、高校生の地位達成志向を高める効果をもっている。

なお「努力」や「まじめさ」を重視する子育て観は、日本では高校生の「親友」(0.028, 0.030)を重視する傾向を強めるが、「趣味」(0.000, -0.070)や「人の役に立つ」(-0.046, -0.071)を重視する傾向は弱める働きをもっている。地位達成志向の強い家庭で育った子どもにとって、大望成就に向けて支えあえる仲間は重要だが、時間や労力を削ぐ趣味や社会貢献は「邪念」や「無駄」と映るのかもしれない。対照的にアメリカでは、「努力」は「結婚」(0.033***)を、「まじめさ」は「人の役に立つ」(0.049***)を重視させる方向に作用している。

つぎに社会性(共生)志向の再生産の実態に注目してみよう。表5より、「社会性」と「人の役に立つ」の相関係数は、日本では負(-0.028)、アメリカでは弱い正(0.019)であることから、母親の社会性志向が高校生の共生志向を育む要因になっていると考えられない⁽⁵⁾。さらに日本では、母親のいずれの子育て観も高校生の共生志向を育む方向には有意に作用していない。それにもかかわらず「人の役に立つこと」重視する母子(「とても重要」母46.7%,高校生73.0%、「少し重要」母51.6%,高校生23.2%)が非常に多いのは、共生志向が母子間で再生産されているのではなく、社会的に再生産されていることを示唆している。すなわち共生志向が社会全体に共有されているため、母親がそれを重視していなくても、高校生は自らを取り巻く学校文化や若者文化などの影響を受けて無意識のうちにそれを内面化していると考えられる。逆に母親が共生志向を重視していても、それを自明視して意図的に子どもに伝達することを怠っている場合も少なくなく、そうした状況が共生志向を支持しない社会環境と重なった場合、高校生によって共生志向は内面化されにくくなると考えられる。

最後に、コントロールにかかわる子育て観が高校生の価値形成におよぼす影響に着目してみよう。「ながされない」は、日本では「結婚」(0.113*)や「子ども」(0.081)、「趣味」(0.034)や「親友」(0.155**)、「教育」(0.048)と比較的強い相関をもつ。また「親に従う」も、「結婚」(0.044)や「子ども」(0.094+)、「親友」(0.036)、「仕事で成功」(0.048)や「教育」(0.068)と相関をもつ。これらの結果は、仲間や異性との交流や趣味を重視する高校生の生活を、日本の母親が注意深くモニターしており、ある程度コントロールしようとしている状況を反映していると解釈することができる。そして母親のそうした姿勢が、高校生の地位達成志向を高める方向に作用していると考えられる。アメリカでも、「ながされない」は「結婚」(0.055***)や「親友」(0.023+)、「親に従う」は「趣味」(0.023+)や「仕事で成功」(0.025*)と相関をもっており、この解釈と矛盾しないパターンを示している。

以上の分析より、母子間の価値観の再生産の実態として、次の3点が明らかになった。第一に、地位達成志向は母子間で再生産されている。すなわち「努力」「まじめさ」を重視する母親をもつ高校生は、「仕事で成功」「教育」を重視する傾向がある。第二に、社会性(共生)志向は母子間で再生産されていない。ただし日本では共生志向が社会で広く共有されているために、高校生によって暗黙のうちに内面化されているという仮説をたてることができる。第三に、家庭生活志向や自己充足志向の強い高校生の生活を母親たちはある程度コントロールしようとしており、そのことが高校生の地位達成志向を支える働きをしているという仮説をたてることができる⁽⁶⁾。

3.4 母子間の会話頻度と価値観の再生産

会話は価値観をはじめとする文化資本の継承にとって、きわめて重要な役割を果たしている。ここでは母子間の会話頻度の実態を明らかにし、会話頻度によって母子間の価値観の再生産の状況にいかなる差異があるのかを、地位達成志向と社会性(共生)志向の再生産に焦点をあてて明らかにする。前項では、日米で母親が「努力」や「まじめさ」を重視することと高校生が「仕事で成功」や「教育」を重視することの間には相関があること、母親が「社会性」を重視することと、高校生が「人の役に立つ」ことを重視することの間には相関がないことを確認した。これらの関係が母子の会話頻度の多寡によってどのように変化するのかを明らかにすることが、本項のねらいである。

図4は、日米の母子が勉強(成績・進学・授業内容)、日常(世の中の出来事・悩み事・学校の出来事)、仕事(高卒後の就職)についてどれだけ頻繁に会話したのか、その平均値をレーダーグラフに示したものである。また表6は、会話頻度の平均値を家庭的・社会文化的要因別に整理したものである。

全体的な傾向として、日本の母子間の会話頻度はアメリカと比べて著しく少なく、「時々:1」話し合う程度であることがわかる。とりわけ仕事については、日本の母子間でほとんど会話が交わされていない。会話頻度は日本でもアメリカでも、勉強の会話>日常の会話>仕事の会話の順に高い。

グループ別にみると、日本ではいずれのテーマについても、「男性」の会話頻度が低い。また相対的に階層が高く「進学系」「進路多様系」である場合は勉強や日常の会話の頻度が高く、階層が低く「就職系」の場合は仕事の会話の頻度が高い。アメリカでも、勉強や日常の会話の頻度は高階層「進学系」で高いが、仕事の会話の頻度は中階層「進路多様系」で高い。

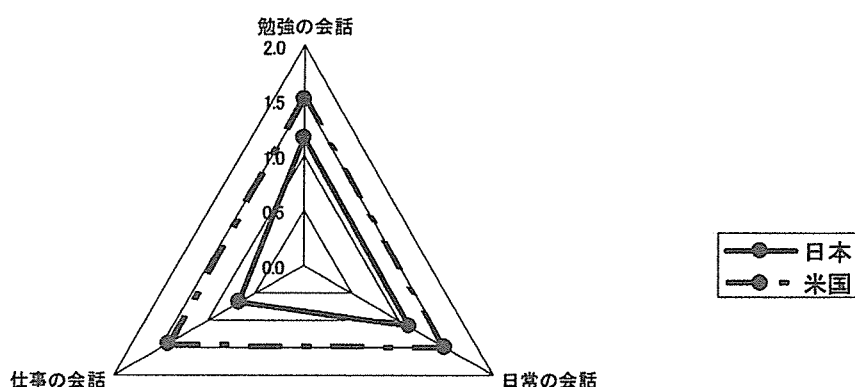


図4. 日米の母親の会話頻度

表6 母子の会話頻度 - 所得・学歴・性別・学科による差異〔平均値〕

		勉強の会話		日常の会話		仕事の会話	
		日本	米国	日本	米国	日本	米国
所得	高所得層	1.12	1.68	1.16	1.64	0.40	1.35
	中所得層 (高)	1.20	1.58	1.10	1.55	0.61	1.46
	中所得層 (低)	1.09	1.51	1.11	1.49	0.70	1.48
	低所得層	1.17	1.37	1.10	1.34	0.91	1.35
	検定	NS	***	NS	***	***	***
母学歴	高学歴層	1.19	1.43	1.12	1.41	0.29	1.41
	中学歴層	1.16	1.59	1.14	1.57	0.56	1.45
	低学歴層	1.17	1.65	1.11	1.62	0.90	1.40
	検定	NS	***	NS	***	***	**
学科ランク	進学系	1.18	1.64	1.11	1.58	0.48	1.40
	進路多様系	1.18	1.48	1.17	1.47	0.80	1.45
	就職系	1.06	1.41	1.06	1.38	1.22	1.41
	検定	NS	***	NS	***	***	**
性別	男性	1.13	1.53	1.04	1.50	0.55	1.42
	女性	1.19	1.51	1.18	1.49	0.76	1.42
	検定	NS	*	**	NS	+	NS

注) ***: p<.001, **: p<.01, *: p<.05, +: p<.1

表7・8は、日米の母子間の価値観の再生産の実態を、会話頻度別に相関係数で捉えた結果である。会話頻度は会話に関する7つの項目の和(0~14)の平均値を境に、高低の2グループに分類した。なお表5の場合と同様に、相関係数の有意性を判断するにあたって、アメリカ側のデータで5%水準の有意性が認められた相関係数0.032(表6のセル[高頻度]「ながされない」×「人の役に立つ」を参照)よりも大きな相関係数については、意味のある相関とみなすことにする。

まず地位達成志向の再生産の実態に注目してみよう。「努力」と「仕事で成功」「教育」の相関係数を、会話頻度の高い親子と低い親子の間で比較してみると、日本では「仕事で成功」(高0.054⇔低0.005)でも「教育」(高0.082⇔低0.001)でも、会話頻度の高い親子間で大きくなっ

ている。このことは日本では地位達成志向の価値観が、会話を通して親から子へと伝達しなければ、内面化されにくい価値観であること示唆している(付表6参照)。なお「まじめさ」と「仕事で成功」(高 0.027⇔低 0.041)の相関係数は、会話頻度の低い親子間で強くなっている。このことは会話頻度の少ない母子間の場合、母親の信念・探求心・まじめさを重視する態度が、子どもの地位達成志向に結びつくことを示唆している。

表7 日本の高校生の価値観と母親の子育て観の関係〔会話頻度別の相関係数〕

高頻度 子育て観	価値観	地位達成志向		家庭生活志向		自己充足志向		共生志向 人の役に立つ
		仕事で成功	教育	結婚	子ども	趣味	親友	
地位達成志向	努力	0.054	0.082	0.015	0.008	-0.056	0.004	-0.030
まじめ志向	まじめさ	0.027	0.009	-0.059	0.019	-0.145+	-0.001	-0.055
社会性志向	社会性	-0.066	0.007	-0.042	-0.009	-0.113	-0.035	-0.029
自律志向	ながさねない	0.006	0.067	0.050	0.097	-0.032	0.138+	0.023
権威志向	親の言うこと	0.095	0.033	0.037	0.079	-0.038	0.036	-0.055
低頻度 子育て観	価値観	地位達成志向		家庭生活志向		自己充足志向		共生志向 人の役に立つ
		仕事で成功	教育	結婚	子ども	趣味	親友	
地位達成志向	努力	0.005	0.001	0.006	0.009	0.061	0.055	-0.064
まじめ志向	まじめさ	0.041	-0.019	0.017	-0.014	0.002	0.060	-0.089
社会性志向	社会性	0.013	0.037	0.086	0.024	0.087	0.117	-0.022
自律志向	ながさねない	-0.009	0.029	0.160*	0.065	0.095	0.167*	-0.007
権威志向	親に従う	0.007	0.091	0.043	0.103	0.012	0.030	0.055

注) ***: p<.001, **: p<.01, *: p<.05, +: p<.1

表8 米国の高校生の価値観と母親の子育て観の関係〔会話頻度別の相関係数〕

高頻度 子育て観	価値観	地位達成志向		家庭生活志向		自己充足志向		共生志向 人の役に立つ
		仕事で成功	教育	結婚	子ども	趣味	親友	
地位達成志向	努力	0.084***	0.038*	0.043**	0.025	0.031	0.006	0.037
まじめ志向	まじめさ	0.042**	0.092***	0.016	0.010	0.002	-0.024	0.051**
社会性志向	社会性	0.025	-0.004	0.045**	0.037*	-0.027+	0.019	0.027+
自律志向	ながさねない	-0.015	-0.018	0.025	0.014	-0.033*	-0.019	0.032+
権威志向	親の言うこと	-0.013	-0.010	0.001	-0.010	-0.012	0.008	0.023
低頻度 子育て観	価値観	地位達成志向		家庭生活志向		自己充足志向		共生志向 人の役に立つ
		仕事で成功	教育	結婚	子ども	趣味	親友	
地位達成志向	努力	0.068***	0.058**	0.027	0.011	0.015	-0.023	-0.025
まじめ志向	まじめさ	0.059**	0.053**	0.009	-0.021	-0.005	-0.018	0.030
社会性志向	社会性	0.027	-0.003	0.066***	0.023	0.004	0.034+	-0.005
自律志向	ながさねない	0.022	0.000	0.094***	0.004	0.000	0.056**	-0.025
権威志向	親に従う	0.049++	0.028	0.032+	0.006	-0.034+	-0.025	-0.011

注) ***: p<.001, **: p<.01, *: p<.05, +: p<.1

一方、アメリカでは「努力」と「仕事で成功」(高 0.084***⇔低 0.068***)や「教育」(高 0.038**⇔低 0.058**),「まじめさ」と「仕事で成功」(高 0.042**⇔低 0.059**)や「教育」(高 0.092**⇔低 0.053**)の間に、会話頻度にかかわらず強い相関がみられる。このことは、母子間の会話頻度が全体として高い米国では、会話頻度の低いグループでも地位達成志向やまじめ志向の価値観が親から子へと十分に伝達されていることを示していると理解することができる。地位達成志向やまじめ志向の価値観が社会全体で共有されているため、母親があえて伝達しなくても、子どもに内面化されることを示していると解釈することもできる(付表6参照)。

つぎに社会性(共生)志向の再生産の実態に注目してみよう。「社会性」と「人の役に立つ」の間には、日本では会話頻度にかかわらず負の弱い相関(高-0.029⇔低-0.022)がみられる。両変数の関係が会話頻度によって大きく変化しないのは、共生志向が母子間で再生産されるのではなく、社会的に再生産されるという仮説に矛盾しない結果である。他方、アメリカでは、母子間の会話頻度が高い場合には正の相関(0.027+)、低い場合には無相関(-0.007)が確認される。アメリカでは共生志向は日本ほど高い水準で社会的に共有されていないため、会話を通して親から子へと意識的に伝達しなければ、子どもに内面化されにくい価値観なのであろう(付表7参照)。

以上の結果より、会話頻度別の日本の母子間の価値観の再生産の実態について、次の3点が明らかになった。第一に、日本の母子の会話頻度はアメリカと比べて著しく低いが、アメリカと同様に、勉強や日常の会話の頻度は相対的に恵まれたグループで高い傾向がある。仕事の会話は、日本の母子間でほとんど交わされていないが、そのなかでは専門学科の高校生と母親の間で会話頻度が高い。第二に、地位達成志向は、アメリカでは会話頻度にかかわらず母子によって共有されているのに対して、日本では会話頻度が高いほど母子間で再生産されている。第三に、社会性(共有)志向は、アメリカでは会話頻度が高いほど母子間で再生産されているが、日本では母子間で再生産されているのではなく、社会的に再生産されていると考えられる。

4. おわりに

本稿より、大きくつぎの4つの知見が得られた。

第一に、高校生の価値観の日米比較より、日本の高校生の地位達成志向は中階層を中心に、全体として希薄であり、むしろ家庭生活志向・自己充足志向・共生志向を強くもっている実態が確認された。第二に、母親の子育て観の日米比較より、社会性志向は家庭的・社会文化的背景にかかわらず日米の母親たちによって普遍的に共有されている子育て観であること、日本では地位達成志向が全体として希薄であるが、高階層を中心とする比較的幅広いグループによって支持されていること、そして低階層の母親を中心に仲間にながされない自律性と親の言うことをよく聞く従順さを高校生にもとめる傾向があることが確認された。第三に、母子間での価値観の再生産の実態として、日本でもアメリカでも地位達成志向が母子間で再生産されていること、日本では社会性(共生)志向は母子間で再生産されておらず、社会で広く共有されているために、暗黙のうちに高校生によって内面化されていると考えられることが示された。第四に、母子間の価値観の再生産に会話頻度がおよぼす影響について、母子間の会話頻度が高いほど日本では地位達成志向が、アメリカでは社会性(共生)志向が再生産されやすいこと、そして日本の共生志向やアメリカの地位達成志向のように、社会で広く共有されている価値観の再生産には、母子の会話頻度は影響をおよぼさないことが明らかになった。

以上のように、日本の高校生は、メリトクラシーの枠組みだけでは捉えられない多様な価値観を有しており、それにもとづいて日々の行動パターン、選択、ライフスタイルを形づくっている。したがって高校生の学習指導・生活指導・進路指導を行う際には、学校や職場での成功というメリトクラティックな基準とは独立した、複数の基準の兼ね合いのなかで高校生が行動や選択を行っていることを理解しておく必要がある。たとえば高校生にとって「人の役に立つこと」が重要な判断基準である以上、学ぶことや働くことの意義を、成績の序列・試験の合否・社会的威信といった地位達成志向の基準だけではなく、知識・技能・労働が人類社会の幸福に具体的にどのように寄与しうるのかという共生（社会貢献）志向の基準でも説明していく必要があるだろう。また高校生にとって「結婚して幸せな家庭生活をおくること」や「子どもをもつこと」が重大な関心事である以上、その実現を困難に感じさせる「仕事と家庭の両立」の問題や「若年雇用」の問題を進路指導のなかで積極的にとりあげ、個々の生徒が望むワーク・ライフ・バランスを実現するためにどのような選択が適切なのかという基準で進路を方向づけていく必要もあるだろう。またそれに対応して教育達成の研究は、子どもたちの生活設計に学校が果たす多面的な役割の成果と、児童生徒の行動や選択の妥当性を評価する取り組みへと発展させていかなければならない。

母親たちもまた多様な子育て観を有しており、高校生の価値形成に対して一定の影響をもっている。したがって家庭と並ぶ子どもの社会化のエージェントである学校や地域社会は、家庭の強みを活かし、弱みを補う方向で互いに連携しながら、次世代育成に取り組んでいく必要がある。たとえば日本の母親は社会性志向が極めて高く、良識のある判断・自制心・協調性・誠実さ・思いやり・責任感をほぼ普遍的に重視していることは大きな強みといえる。この10年余り、子どもたちの社会性の欠如が危惧され、「家庭の教育力」の向上が盛んに訴えられてきた。子どもたちの社会性が実際に低下しているのかどうかは検証する必要があるが、仮に低下しているとして、母親の社会性志向のさらなる徹底をもとめるよりも、母子間での価値観の再生産を阻む構造的要因に目を向けるほうが、対策としてはるかに有効であろう。すなわち価値観の伝達と再生産に重要な役割を果たす母子間の会話頻度が日本では著しく低いことに注目し、家族のコミュニケーションの時間を確保するための条件整備を学校・地域社会・職場においてすすめることで、家庭が既にもつ教育力を活かしていく取り組みがもとめられる。

一方、日本の母親の地位達成志向が全体的に希薄であり、高階層を中心とするグループによって再生産されていることは、高校生の地位達成志向に構造的な偏りを招く一因となっている。地位達成志向は、いかなる進路を選択しようとも、社会参加を十分に果たしていくためには少なからず必要な価値観であるため、家庭が地位達成志向の再生産にむけて機能していない場合には、学校・地域社会・職場がその役割を補っていく必要があるだろう。価値観の再生産が母親を経由せずに達成されうることは、日本の共生志向の事例で確認したとおりである。したがって子どもたちに学ぶことや働くことの意義を説明し、努力することの意味とその成果の喜びを伝えていく営みに、学校・地域社会・職場も積極的に参画していくことがもとめられる。

[注]

- (1) 全米の第 12 学年生徒を代表するように作成された重み付け変数(F4F2PNWT)を使用した後、もとのサンプル・サイズに再調整した。
- (2) 付表 2 にみるとおり、「教育」は「地位達成」因子 (0.471) よりも「共生」因子 (0.561) と強い相関を示している。このことは日本の高校生にとって、よい教育を受けることが自己の成功よりも、よりよい社会づくりに貢献する意味合いをもっていることを示唆している。これは注目に値する特徴といえるが、本稿では従来のメリトクラシーの枠組みにもとづいて、よい教育を受けることの価値を地位達成にもとめる。なお高卒後 1 年目には、高卒者によって「教育」は地位達成の価値として位置づけられるようになる。また米国の高校生には、「教育」は地位達成の価値として位置づけられている (深堀、2006 年 a)。
- (3) アメリカの合計特殊出生率の高さは、子育て支援の充実というよりは、多様な働き方を許容する柔軟な雇用慣行にあるとされている。ライフステージにあわせて勤務条件を変更できる開かれたシステムが、共働き世帯の仕事と家庭の両立を支えている。しかしこの開かれたシステムの恩恵を受けられる高技能層とその他の層との二極化が問題となっている(前田、2004 年)。
- (4) 付表 5 から「仕事で成功 (0.109*)」「教育 (0.127*)」を重視する地位達成志向の価値観は、母子で共有されていることがわかる。
- (5) 付表 5 でも「人の役に立つ (0.082)」の相関係数は統計的に有意ではないことから、母子間で共生志向が再生産されているということとはできない。
- (6) 本分析では母親の子育て観と高校生の価値観の連関をみるために、二変量の相関に注目してきた。しかしながら本稿でみたとおり、高校生の価値観や母親の子育て観には、家庭的・社会文化的要因によるいくつかの重要なグループ差異が確認された。これら第三の変数による擬似相関の問題に対処するためには、家庭的・社会文化的要因の影響を統制したうえの母親の子育て観と高校生の価値観の連関をみる必要がある。その作業は、母親の子育て観変数と高校生の価値観変数の対応関係やサンプル数の少なさを勘案して、慎重に行う必要があるため、今後の課題としたい。

付表 1. 日米の高校生・日本の高卒者・日本の保護者の地位達成志向
 (「とても重要」と回答した%)

	仕事で成功	仕事で尊敬	お金持ちになる
高校3年生・日本〔米国〕	53.3 [88.1]	45.5 [66.7]	34.1 [37.3]
高卒1年目・日本〔高卒2年目・米国〕	46.3 [89.4]	42.7 [-]	26.7 [38.4]
保護者・日本〔米国〕	25.3 [-]	27.9 [-]	5.5 [-]

付表 2. 日本の高校生の価値観に関する因子分析結果
 [主成分分析法、バリマックス回転]

	I 家庭生活	II 共生	III 地位達成	IV 自己充足	共通性
結婚して幸せな家庭生活をおくこと	0.825	0.066	0.181	0.076	0.724
子どもをもつこと	0.822	0.170	0.121	0.021	0.720
不平等をなくすための社会活動すること	0.066	0.794	-0.089	0.033	0.644
よい教育を受けること	-0.001	0.561	0.417	0.138	0.508
人の役に立つこと	0.371	0.550	-0.113	0.346	0.572
親や親せきの近くで暮らすこと	0.304	0.496	0.125	-0.451	0.557
子どもに恵まれた条件を与えること	0.357	0.389	0.242	0.022	0.338
お金持ちになること	0.174	-0.109	0.773	-0.011	0.641
仕事で成功すること	0.077	0.122	0.727	0.168	0.578
仕事で人に尊敬されること	0.083	0.442	0.490	0.332	0.553
親元を離れて自立すること	-0.071	0.123	0.168	0.654	0.476
好きなことを楽しむ時間をもつこと	0.201	0.033	0.149	0.535	0.350
親友をもつこと	0.511	0.096	-0.090	0.523	0.552
因子寄与	2.068	1.925	1.742	1.475	7.210
因子寄与率 (%)	15.9	14.8	13.4	11.3	55.5

付表 3. 日本の母親の子育て観に関する因子分析結果
 [主成分分析法、バリマックス回転]

	I 社会性志向	II まじめ志向	III 地位達成志向	IV 権威志向	V 自律志向	共通性
良識のある判断ができること	0.748	0.016	0.245	-0.034	0.220	0.669
自制心があること	0.737	0.157	0.172	0.011	0.250	0.660
まわりの人と協調できること	0.698	0.127	-0.128	0.252	0.175	0.614
思いやりがあること	0.670	0.372	-0.053	0.003	-0.152	0.613
誠実であること	0.597	0.170	0.440	0.213	-0.222	0.673
責任感があること	0.570	0.550	0.079	0.094	0.040	0.644
信念を貫くこと	0.016	0.787	0.138	0.013	0.314	0.737
探求心が強いこと	0.200	0.715	0.142	0.031	0.139	0.592
まじめであること	0.227	0.664	0.047	0.275	-0.102	0.581
成功しようと努力すること	0.106	0.194	0.888	0.053	0.146	0.861
親の言うことをよく聞くこと	0.100	0.153	0.081	0.932	0.094	0.917
仲間づきあいがよいこと	0.221	0.220	0.109	0.104	0.831	0.810
因子寄与	2.881	2.192	1.157	1.078	1.064	8.372
因子寄与率	24.0	18.3	9.6	9.0	8.9	69.8

付表4. 日本の母子間の会話頻度に関する因子分析結果
 [主成分分析法、バリマックス回転]

	I	II	III	共通性
	勉強の会話	日常の会話	仕事の会話	
成績について	0.806	0.125	-0.105	0.675
高卒後の進学について	0.788	0.077	0.042	0.628
授業の内容について	0.568	0.308	0.384	0.565
世の中の出来事について	-0.007	0.852	-0.041	0.727
悩み事について	0.201	0.643	0.316	0.554
学校の出来事について	0.421	0.584	-0.006	0.518
高卒後の就職について	-0.039	0.043	0.930	0.869
因子寄与	1.812	1.597	1.127	4.536
因子寄与率	25.9	22.8	16.1	64.8

付表5. 日本の母子の価値観の関係 [相関係数]

	高校生の価値観						
	地位達成志向		家庭生活志向		自己充足志向		共生志向
	仕事成功	教育	結婚	子ども	趣味	親友	人の役に立つ
仕事で成功	0.109*	-0.006	0.114*	0.062	-0.063	-0.036	-0.024
教育	0.037	0.127*	-0.023	0.057	0.003	-0.015	0.029
結婚	0.090+	0.019	0.114*	0.102	0.027	0.034	0.024
子ども	0.051	0.021	0.096+	0.112*	0.027	0.086	0.082
趣味	-0.048	0.025	0.045	0.033	-0.003	-0.026	0.000
親友	-0.039	-0.027	0.042	0.038	0.002	0.057	0.049
人の役に立つ	-0.016	0.038	0.056	0.100+	-0.014	0.091+	0.082

***: p<.001, **: p<.01, *: p<.05, +: p<.1

付表 6. 日米の母子間での地位達成志向の再生産-会話頻度別 (%)

	日本 母親「努力」	高校生「仕事で成功」				高校生「教育」			
		とても 重要	少し重要 重要ではない	合計	(N)	とても 重要	少し重要 重要ではない	合計	(N)
高頻度	とても重要	60.6	39.4	100.0	71	38.0	62.0	100	71
	やや重要～重要ではない	49.4	50.6	100.0	85	31.8	68.2	100	85
	合計	54.5	45.5	100.0	156	34.6	65.4	100	156
		ピアソン χ^2 正確有意確率(片側)0.109				ピアソン χ^2 正確有意確率(片側)0.258			
低頻度	とても重要	52.3	47.7	100.0	65	29.2	70.8	100	65
	やや重要～重要ではない	44.6	55.4	100.0	112	33.9	66.1	100	112
	合計	47.5	52.5	100.0	177	32.2	67.8	100	177
		ピアソン χ^2 正確有意確率(片側)0.204				ピアソン χ^2 正確有意確率(片側)0.318			
米国									
高頻度	とても重要	90.4	9.6	100.0	3048	85.9	14.1	100	304
	やや重要～重要ではない	85.7	14.3	100.0	1014	82.2	17.8	100	101
	合計	89.2	10.8	100.0	4062	85.0	15.0	100	406
		ピアソン χ^2 正確有意確率(片側)0.000				ピアソン χ^2 正確有意確率(片側)0.001			
低頻度	とても重要	87.9	12.1	100.0	1962	84.2	15.8	100	196
	やや重要～重要ではない	83.8	16.2	100.0	1071	79.5	20.5	100	107
	合計	86.4	13.6	100.0	3033	82.6	17.4	100	303
		ピアソン χ^2 正確有意確率(片側)0.001				ピアソン χ^2 正確有意確率(片側)0.003			

付表 7. 社会性 (共生) 志向の再生産

	母親「社会性」	高校生「人の役に立つ」							
		日本				米国			
		とても 重要	少し重要 重要ではない	合計	(N)	とても 重要	少し重要 重要ではない	合計	(N)
高頻度	とても重要	69.2	30.8	100.	78	35.2	64.8	100.	2762
	やや重要～重要ではない	73.8	26.3	100.	80	34.1	65.9	100.	1304
	合計	71.5	28.5	100.	158	34.9	65.1	100.	4066
		ピアソン χ^2 正確有意確率(片側)0.325				ピアソン χ^2 正確有意確率(片側)0.257			
低頻度	とても重要	77.5	22.5	100.	80	33.2	66.8	100.	1555
	やや重要～重要ではない	72.0	28.0	100.	100	28.8	71.2	100.	1485
	合計	74.4	25.6	100.	180	31.1	68.9	100.	3040
		ピアソン χ^2 正確有意確率(片側)0.253				ピアソン χ^2 正確有意確率(片側)0.004			

[参考文献]

- ・ 天野郁夫・市川昭午・潮木守一・喜多村和之編『教育は「危機」か - 日本とアメリカの対話』有信堂、1987年。
- ・ 卯月由佳「小中学生の努力と目標 - 社会的選抜以前の親の影響力」本田由紀編『女性の就業と親子関係 - 母親たちの階層戦略』勁草書房、2004年。
- ・ NHK 放送文化研究所編『NHK 中学生・高校生の生活と意識調査 - 楽しい今と不確かな未来』

日本放送出版協会、2003年。

- ・ NHK 放送文化研究所編『現代日本人の意識構造 - 第六版』日本放送出版協会、2004年。
- ・ 大多和直樹「生徒文化 - 学校適応」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版、2000年、185～223頁。
- ・ 国立社会保障・人口問題研究所「主要先進国の合計特殊出生率 1950～2004年」『人口統計資料集 2006年版』(<http://www.ipss.go.jp/syoushika/site-ad/index-tj.htm>、2007年1月26日)
- ・ 尾嶋史章編著『現代高校生の計量社会学 - 進路・生活・世代』ミネルヴァ書房、2001年。
- ・ 加藤寛『2004 - 2005年ライフデザイン白書 - 新しい生活価値観が変えるライフデザイン』第一生命経済研究所、2003年。
- ・ 荻谷剛彦「学習時間の変化」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版、2000年、149～164頁。
- ・ 千石保・L. デビッツ『日本の若者・アメリカの若者 - 高校生の意識と行動』日本放送出版協会、1992年。
- ・ 轟亮「職業観と学校生活間 - 若者の〔まじめ〕は崩壊したか」尾嶋史章編著『現代高校生の計量社会学 - 進路・生活・世代』ミネルヴァ書房、2001年、129～158頁。
- ・ 長尾彰夫・池田寛編『学校文化 - 深層へのパースペクティブ』東信堂、1990。
- ・ 日本青少年研究所『学校教育とその効果』日本青少年研究所、1984年。
- ・ 日本青少年研究所『国際比較からみた日本の高校生』日本青少年研究所、2005年。
- ・ 樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版、2000年。
- ・ 広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』講談社現代新書、1999年。
- ・ 深堀聡子「高卒者と保護者が共有する価値観 - 親友と好きなことを楽しむ時間・人の役に立つこと」佐藤博樹編著『若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証研究(平成17年度総括研究報告書)』平成16-18年度厚生労働科学研究費補助金(政策科学推進研究事業)、総括研究報告書、2006年a、50-65頁。
- ・ 深堀聡子「高校生の生活と意識の日米比較 - 地位達成志向から共生の価値観へ」石田浩編著『東京大学社会科学研究所シリーズ - 高校生の進路選択と意識変容』第21号、東京大学社会科学研究所、2006年b、81-95頁。
- ・ 深堀聡子「高校生の生活と意識 - 日米比較より」佐藤博樹編著『若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証研究(平成16年度総括研究報告書)』平成16-18年度厚生労働科学研究費補助金(政策科学推進研究事業)、総括研究報告書、2005年、102-132頁。
- ・ 本田由紀『「非教育ママ」たちの所在』本田由紀編『女性の就業と親子関係 - 母親たちの階層戦略』勁草書房、2004年。
- ・ 前田正子『子育てしやすい社会 - 保育・家庭・職場をめぐる育児支援策』ミネルヴァ書房、2004年。
- ・ National Center for Education Statistics (NCES)(2002), *National Education Longitudinal Study: 1988-2000 Data Files and Electronic Codebook System*. Washington D.D.: U.S. Department of Education.
- ・ OECD (2005), *Society at a Glance* (www.oecd.org/els/social/indicators).

専修学校専門課程「受け皿」説の再検討

鶴田典子

短期高等教育機関の位置づけに関しては様々な知見がすでにある。本章はまずその知見について概観し、現時点への適応性の高い理論的枠組みはどれかを検討する作業を行った。結果、現在の専門学校には就職難の際に就職先延ばしの「受け皿」としての機能が、特に専門学科男子にとってあるということと、そのような「受け皿」としての機能と「しつけ」機関としての役割の混在が推察された。また、既存の「主体的な高卒就職離れ」、「迫られての高卒就職離れ」という概念を踏襲して、実際の希望進路が辿った経路（＝進路変更圧力の有無）と進学先（＝専門学校）への認識との間に関連があるかどうかを確認する作業を行った。結果、就職から専門学校へと進路を変更したグループに関しては、他の専門学校進学者に比べ、自ら選び取った進路という意識が薄い可能性があることが明らかとなった。

1. 専修学校専門課程の位置づけについて

1.1 短期高等教育機関の位置づけに関する様々な知見

短期高等教育機関のうち、専修学校については「すでに20年をこす歴史をもち、またコーホートの2割の進路を受け持つ機関として発展してきているにもかかわらず、高等教育研究として体系的な研究が乏しい領域のひとつである（吉本 2003）」とも言われてはいるが、実際には様々な研究成果が報告されている。機関のもつ役割や位置づけという観点から見れば、例えば大学進学が困難な層の受け皿として専修学校を捉えた岩木・耳塚（1986）や飯島（2000）、専修学校（専門課程）が持つ「伝統的な18歳の高卒者に対する（中略）『しつけ』の機能」に着目した吉本（2003）などが挙げられよう。また、岩木・耳塚（1986）は専修学校への進学者数の増減は高卒者の労働力需要ともリンクするであろうことも指摘している。

一方、短期大学に関しては、近年の進学者の激減を根拠に「短期大学が競争の敗者であることが明らかになった」と断じた天野（2003）がある一方で、清水（2003）のように「短期大学は女子にとって最大の高等教育の機会であることには変わりが」なく、「女子の短期大学志向の傾向や若年女子への旺盛な労働需要が急速に低下することは考えにくい」との主張もある。

1.2 知見の概観

これらの知見を概観するに、当然のことではあるがその調査時点や分析・執筆時点の状況にそれなりに依存した内容となっている。例えば、岩木・耳塚（1986）は専門学校を受け皿として機能させる高校生の「大学離れ」の要因のひとつとして昭和51年（1976年）の私学振興助成法を挙げており、この法改正を受けた高校生の進路の変化の様態が、分析の視角に色濃く反映されている。また、団塊ジュニア層が高校卒業をむかえたのが1990年代初頭であり、飯島（2000）の分析している調査が1994年に実施されたものであることを考えると、氏が専門学校在籍者を大学進学を希望しながらも無理だと判断し競争することなく専門学校を選んだ人たち